鞍馬天狗　解決篇（八巻）

嵐寛寿郎映画

原作者　大佛次郎
脚色者　山中貞男
監督者　山口哲平
撮影者　吉田清太郎
主演者　嵐寛寿郎
紹介　第四百十號

「京洛の夜は更けて、こゝ今出川なる薩摩屋敷の奥深く」――といつた七五調の字幕でこの鞍馬天狗の物語が、極めて大衆的に展開される。立廻り、ケンゲキ・オン・パレードだ、殆んど一分間置きに殺氣が漲つて、白刃が躍るのだ。そして奇蹟の人鞍馬天狗が、暗殺團山岳黨なる文字通り一人殘らず叩き斬つてしまふといふ、「お伽噺」に近い武勇傳、脚色・監督、主演俳優、共に顛る上氣嫌である。可も不可もなし、興味はこゝに萬點盛られて、この映畫の持つ使命は充分果し得てゐる。

キャメラ――僕達は今迄唐澤弘光を過重に讃めてゐた事を氣付く。劍戟場面を撮るキャメラは、驚ろくべき特殊の技術であることを語つてゐる。それにこれは美しい上りを見せて、現象技術なも誇つてゐる。

嵐寛寿郎の鞍天狗は、彼の「右門」と共に十八番だらうから、申分ない。ラストに水中格闘といふ涼しい場面を入れて、タンクの中で寛寿郎の白い肉體を見せたりして大向を喜ばせる等見た眼の面白さは充分。――鈴木重三郎――興行價値――イデオロギー――や三尺物、或ひは妙に氣取つた時代劇の中に、こうした一少年の日の夢――のやうな美雄傳が、可成りの魅力を持つて、無條件に受け入れられることは、この映畫に送られる映畫館の觀客の、萬雷のやうな拍手でも窺ひ得られる。先づ安心して使える時代劇作品。

（九月一日　常盤座）